

# ウクライナから日本に避難している 子どもの教育とメンタルヘルスに関する 現状調査

2024年2月



# ウクライナから日本に避難している子どもの教育とメンタルヘルスに関する現状調査

## 目次

|  |    |
|--|----|
| 1. 調査について .....  | 2  |
| 2. ウクライナの学齢児童の保護者を対象とした調査の結果(22名) .....                    | 3  |
| 2-1. 概要 .....  | 3  |
| 2-2. ウクライナからの逃避した子どもの教育:現状 .....                           | 3  |
| 2-3. 日本の学校での学習による子どもの情緒とコミュニケーションの変化.....                  | 4  |
| 2-4. 日本の学校におけるウクライナ避難民の子どもの教育の進展と困難.....                   | 6  |
| 2-5. 日本の学校におけるウクライナの子どもの教育を改善・促進するための選択肢.....              | 8  |
| 2-6. ウクライナから避難した子どもの教育の変化.....                             | 9  |
| 2-7. ウクライナから避難した子どもの現在の精神状態と心理的サポートの必要性.....               | 9  |
| 2-8. 避難しているウクライナの子どもの現在の感情とその対処法.....                      | 10 |
| 2-9. 日本に避難しているウクライナの子どもへの支援.....                           | 11 |
| 3. 東京にあるウクライナ日曜学校「Dzherelce」教師へのインタビュー .....               | 13 |
| 3-1. 紛争が子どもの情緒に与える影響と心理的支援の難しさ。適応と支援 .....                 | 14 |
| 3-2. 避難した子どものコミュニケーションと適応。行動と感情の変化.....                    | 15 |
| 3-3. ウェルビーイングが子どもの学業成績に与える影響。避難してきたウクライナの子どもの教育における困難..... | 16 |
| 3-4. ウクライナから避難した子どもに必要な支援と援助。.....                         | 16 |
| 4. ウクライナから避難してきた子どもの母親や祖母へのインタビュー .....                    | 18 |
| Yana Kovalenko、37歳.....                                    | 18 |
| ウクライナの学校での勉強.....  | 18 |
| 日本の学校での勉強.....   | 18 |
| 子どもの情緒を回復させる 子どもたちのメンタルヘルスの変化.....                         | 18 |
| 3つの学校での勉強と余暇の時間配分 .....                                    | 19 |
| Iryna Chymak、36歳 .....                                     | 19 |
| ダブルスクールでの勉強.....   | 19 |
| 言語学習の進歩.....   | 19 |
| 子どもの精神状態.....  | 19 |
| 子どものウェルビーイングの変化.....                                       | 20 |
| Kateryna Voloshenko、35歳 .....                              | 20 |
| 子どものウェルビーイングと心の回復.....                                     | 20 |
| ウクライナの学校でリモート学習.....                                       | 20 |
| Tetiana、(回答者の希望により姓と年齢は記載しない).....                         | 21 |
| Alyona (回答者の希望により、名前を変更し、年齢も記載していない) .....                 | 21 |
| 結論 .....   | 22 |

# 1. 調査について

2022年2月24日にウクライナでの紛争が激化して2年が経過した。この間、さまざまな国に避難した人びとは、現地での生活に慣れ始め、少しずつ新しい言語を学び始めている。紛争で日本に避難しているウクライナ人の生活にも同様の変化が起きており、仕事、言語、子どもの教育などの状況が少しずつ改善されている。

2023年、プラン・インターナショナル・ジャパンでは、主に日本に避難してきたウクライナ人の女の子が直面している困難やウクライナ人の子どもの教育状況に焦点を当てた調査を実施した。私たちは、語学学習や、同時に2つも3つも学校に通わせるなど、子どもの教育やウェルビーイング/幸福に関わるいくつかの問題に強い懸念を抱いていた。このため、子どもの状態や幸福に影響を与えるさまざまな要因、原因、理由をより詳しく知り、この期間に起こった変化を見るために、一定の期間を経て、より詳細な2回目の調査を行うことにした。

2回目となる本調査では、紛争や環境の変化により子どもの気持ちが変わっている可能性があるため、教育だけでなく、子どもの心の健康状態にも注目した。子どもの現状やこの間の変化を知るために、避難したウクライナの子どもの保護者にインタビューとアンケート調査を実施した(インタビュー5人、アンケート22名)。保護者は、自身の体験談や子どもたちの観察、そして日本にいるウクライナの子どもの必要としていることについて意見を述べた。

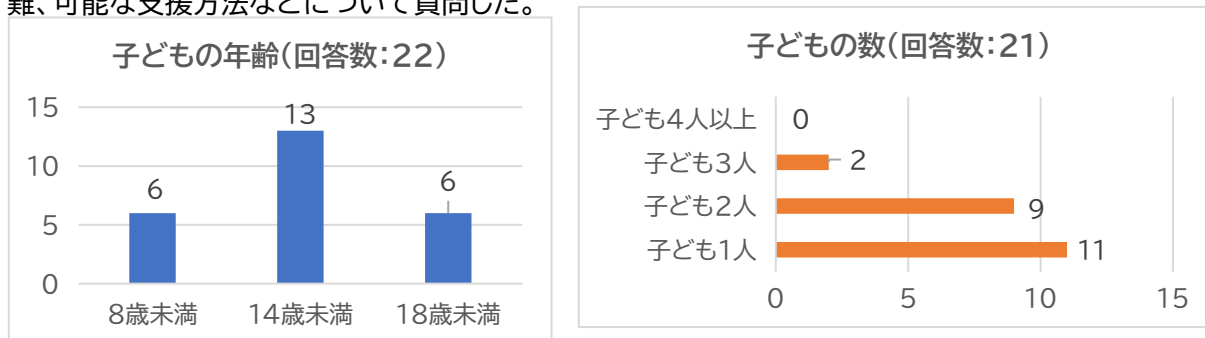
また、東京にあるウクライナ日曜学校「Dzherelce」で教えている教師に、この状況についての意見とコメントを求めた。彼らは約60人のウクライナ人の子どもの面倒を見ているが、その半数は紛争のために日本に避難してきた子どもである。5人のウクライナ人教師(うち1人は校長)に話を聞いた。彼らは、避難してきたウクライナの子どもの仕事の経験や、子どもの行動についての彼ら自身の観察について話し、ウクライナから来た子どもの精神的な幸福と教育を改善するためのヒントや提案を共有してくれた。

## 2. ウクライナの学齢児童の保護者を対象とした調査の結果(22名)

### 2-1. 概要

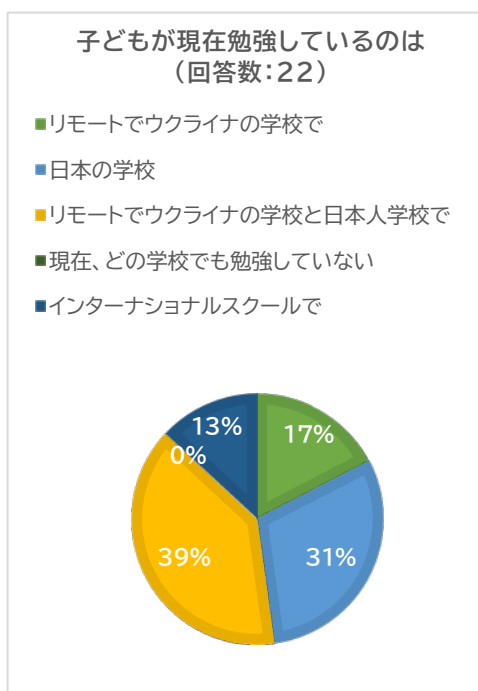
調査対象は 22 人の大人で、子どもの行動の観察に基づいて回答してもらったが、参加人数が少ないため、このデータは実態と異なる可能性がある。調査は 2023 年 11~12 月に完全な匿名で行われ、主に在日ウクライナ人のグループや東京で開催されたウクライナ人イベントで実施された。答えたくない質問に対し回答者は飛ばすことができ、特定の質問に対しては一度に複数の回答を選択することができたため、回答数がインタビュー人数を上回る可能性がある。

調査の目的は、子どもが日本に避難し学校に通い始めてから、学習、行動、情緒面でどのような変化があったかを把握することである。全体的な状況をより詳細に把握し、日本での生活を改善する理由や方法を理解するために、日本とウクライナの学校での学習状況、現在の子どもの行動、情緒、精神状態の変化、子どもたちが直面している困難、可能な支援方法などについて質問した。



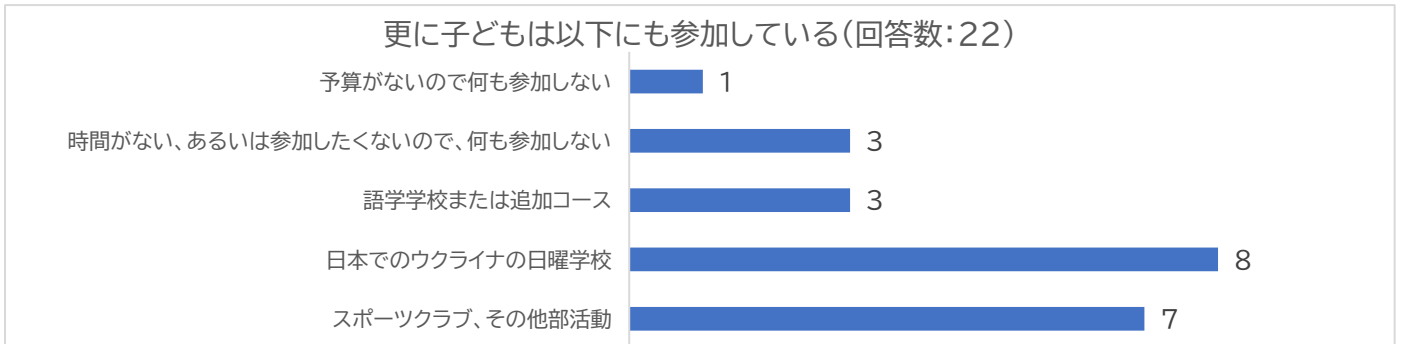
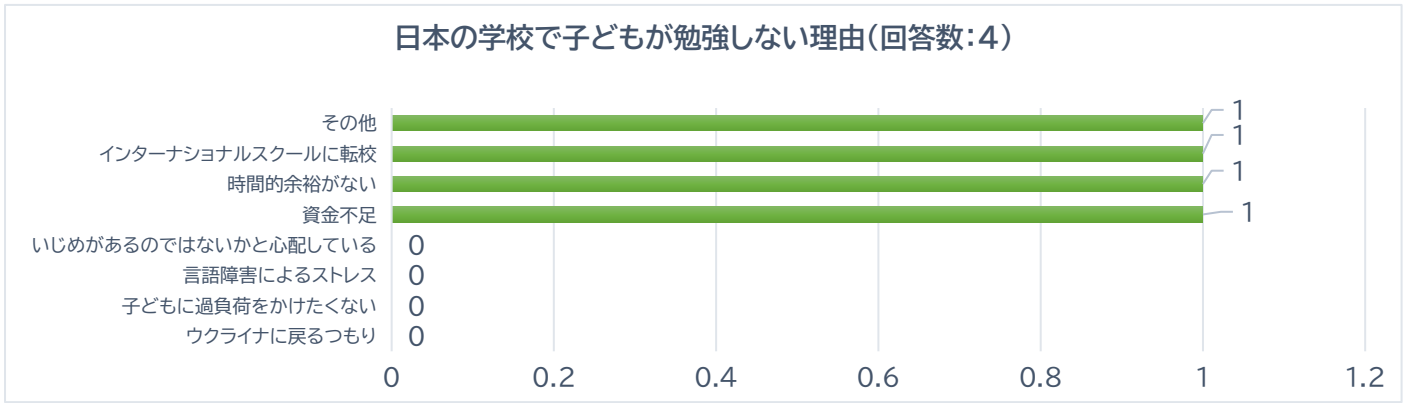
調査に参加した保護者のほとんどが、8~14 歳の子どもの 1 人か 2 人連れている。また、すべての家族が 1 年以上前に来日しているため、既に日本での生活経験があり、その間に起こった子どもの学習や行動の変化に気づくことも可能である。

### 2-2. ウクライナからの逃避した子どもの教育:現状



調査によると、現在約 70%の子どもが日本の公立学校で学んでいる。前回の調査と比較すると、この数字は17%増加している。これは、ウクライナ紛争が長期化し、子どもが日本社会に順応することが必要になってきたことが影響しているのか、あるいは将来設計が変わったことが理由であると想定される。また、ウクライナの学校だけで勉強している子どもは 2 割弱(たまにしかウクライナの学校で勉強していないという回答もあった)で、4割近くの子どもの両方の学校で勉強を続けており、精神的、神経的、肉体的な負担が大きい。

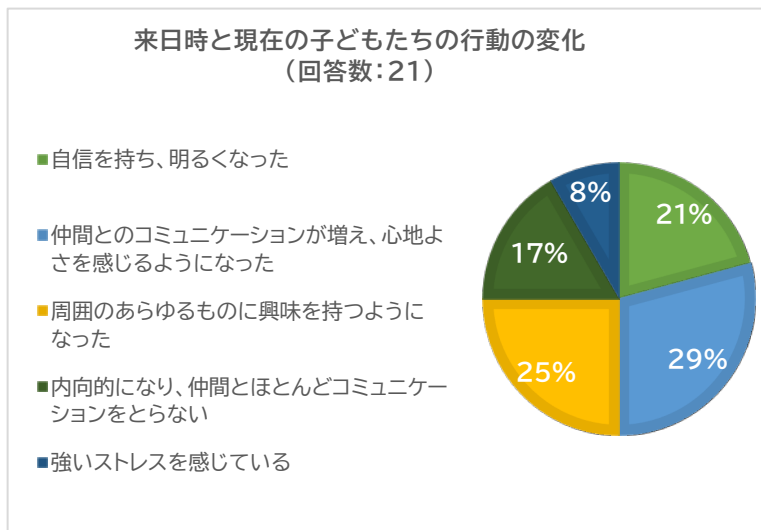
避難しているウクライナの子どもの多くが、日本の学校で学んでいるものの、いまなお日本の学校に通っていない子どももいる。ウクライナの紛争が長引く中、子どもの健全な成長のためには社会性が必要であるため、避難先の学校に通えない子どもいる理由を探ることは非常に重要である。調査によると、「時間とお金がない」、「インターナショナルスクールで学ぶことを選んだ」、などの理由が挙げられている。



ほとんどのウクライナの子どもは、日本の学校だけで教育を受けているわけではない。スポーツクラブや部活動、ウクライナ日曜学校などに時間を見つけて通っている。避難者のほとんどが東京かその近郊に住んでいるため、彼らは東京のウクライナ日曜学校「Dzherelce」に通う。負担が大きいかかわらず、大半の子どもはこの学校に通い、母国語でコミュニケーションを取れることをとても喜んでいる、保護者は子どもたちにもっとこのようなクラスが必要だと言っている。

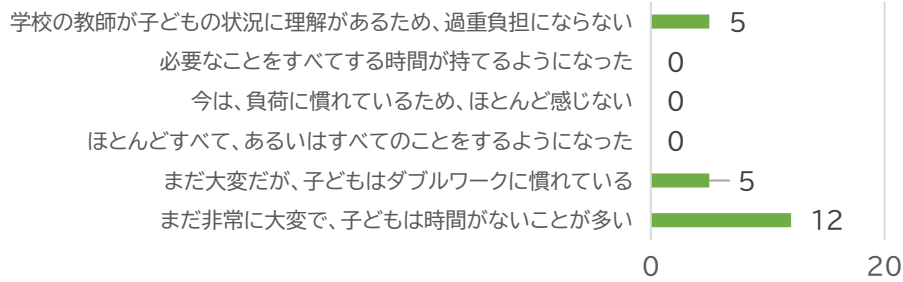
しかし、すべての子どもがウクライナの学校やクラブに通う機会があるわけではない。「住んでいる地域では利用できる活動が非常に限られており、子どもを通わせるには適していない」という保護者の声もあった。また、インターネットで自主的に勉強している子どもには追加の先生がいる、ウクライナの学校のクラブ(例えば美術教室)で遠隔学習している子どもがいる、といった意見もあった。

## 2-3. 日本の学校での学習による子どもの情緒とコミュニケーションの変化



日本に避難して以来、子どもたちの情緒や行動に多くの変化が生じた。当初、子どもたちは新しい国での生活に慣れることが難しかったが、次第にウェルビーイングが向上し始めた。大半の子ども(約75%)は、日本での生活がより快適で、明るく、自信に満ちていると感じ始めた。仲間とのコミュニケーションも増え、身の回りのあらゆることに興味を持ち始めた。しかし、調査によると、約25%の子どもたちは内向的になり社交性をうしなったり、強いストレスを感じたりしている。このような状況は、慣れない環境に長くいるストレスや、母国語でのコミュニケーション不足が原因かもしれない。

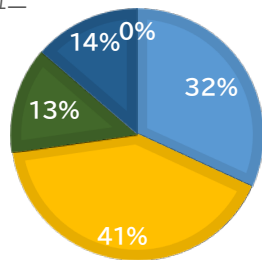
### 学校における子どもへの教育はどう変わったか(回答数:20)



日本に避難してきた子どものほとんどは、2 つまたは 3 つの学校で同時に勉強した経験を持っており、今でも非常にストレスを感じており、自由な休息時間はほとんどない。しかし、23%の保護者は、「子どもはすでにダブルワークに慣れており、ストレスは少し軽減した」と回答した。また、5人に1人の保護者は、「学校の教師が避難している子どもの状況に理解を示し、負担の軽減に努めてくれているので、子どもは負担が軽減され、気持ちが楽になっている」と述べている。

### 日本の学校における子どもの幸福 (回答数:19)

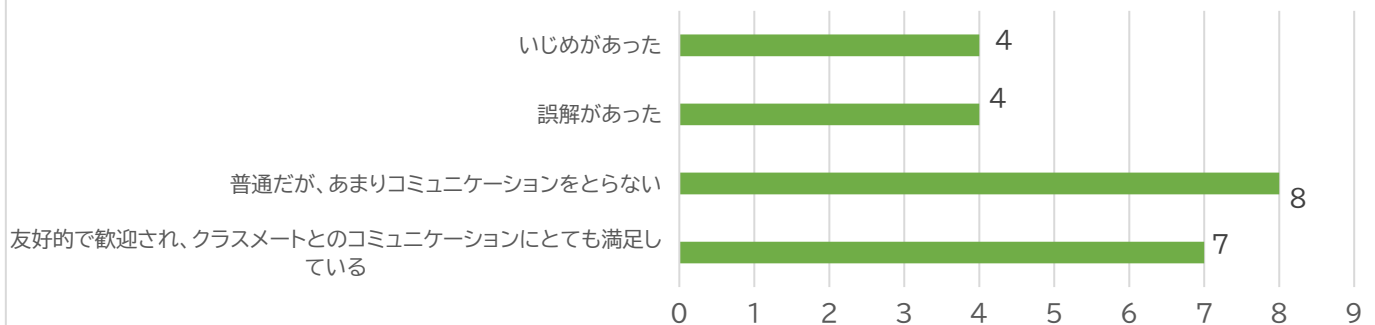
- 自信を持って楽しく学校に通える
- 快適で元気だと感じる
- 言葉や周囲の環境との適合に問題があり、居心地が悪いと感じている
- 適応が難しく、クラスメートとのコミュニケーションが難しい
- 学校でいじめられている



日本の学校に通う中で、避難しているウクライナの子どもの6割近くが、言葉や環境との適合、適応の難しさを経験している。クラスメートとのコミュニケーション不足などから、学校に通うことに居心地の悪さを感じている子どもも多い。また、前回の調査では日本の学校でいじめにあったという回答はなかったが、今回の調査では約15%の子どもが学校でのいじめを経験していた。

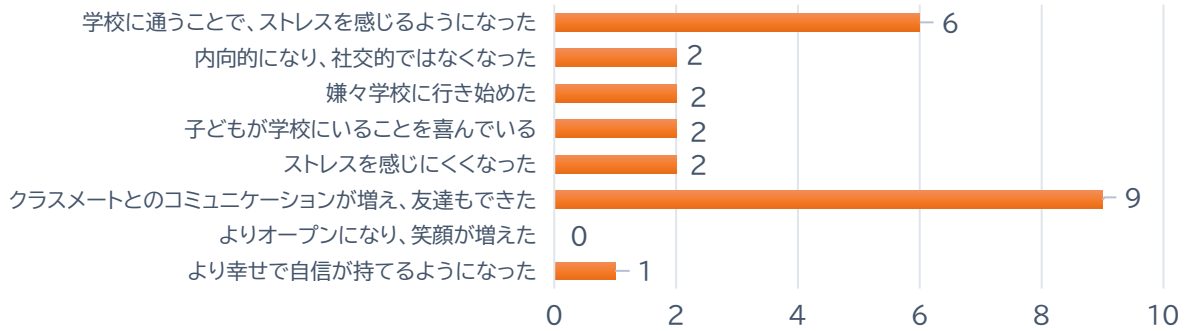
また、現在日本の学校に通うことに心地よさを感じている子どもは32%に過ぎない。心地よいと回答した子どもたちは、学校生活や日本の子どもとの共同学習にかなり順応していた。

### ウクライナの子どもと日本の子どものコミュニケーション(回答数:19)



ほとんどの場合、日本の学校におけるウクライナ人と日本人の子どもは友好的、あるいは普通の関係である。ウクライナ人の子どもは日本人のクラスメートと喜んでコミュニケーションをとるが、大半の子どもは言葉が通じないため、日本人の子どもとはうまくコミュニケーションがとれず、相互に誤解が生じるケースもあった。

日本の学校に通い始めてから現在までの子どもの行動の変化(回答数:19)

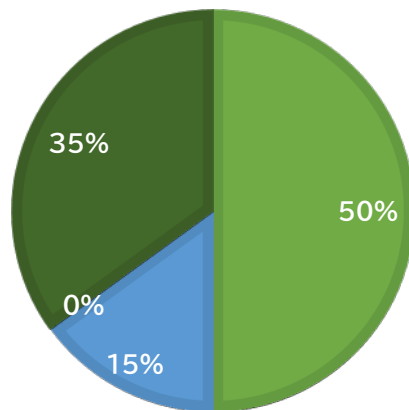


日本の学校に通う子どもの現在のウェルビーイングに加え、彼らの保護者は、時間の経過とともに、子どもたちの行動にいくつかの変化が見られることにも気づいていた。子どもたちの 60%は、学校で日本人の子どもとより頻繁にコミュニケーションをとるようになり、友達を作り、学校に通うことに喜びを感じるようになった。しかしその一方で、25%の子どもは日本の学校に通うことにストレスを感じるようになり、16%の子どもは学校に行きたがらなくなったり、内向的になったりした。これは、異なる環境で過ごす時間が長く、子どもの期待(例えば、言葉を学ぶことへの期待)が十分に満たされなかったことが原因かもしれない。あるいは、ウクライナで慣れ親しんだものが恋しくなり、勉強する環境に嫌気がさしたのかもしれない。

## 2-4. 日本の学校におけるウクライナ避難民の子どもの教育の進展と困難

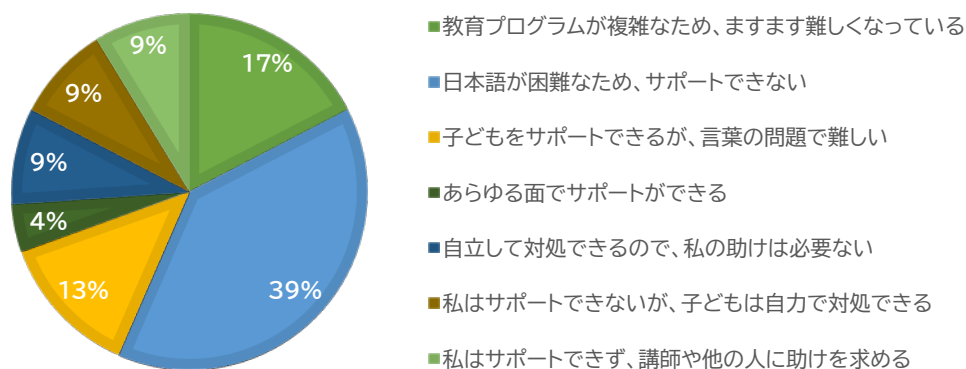
日本人学校に通い始めてから現在までの勉強の変化 (回答数:19)

- 日本語を理解し、コミュニケーションをとるようになった
- 教材を理解しやすくなった
- 学習上の困難について、容易に教師に助けを求めることができる
- 子どもは教科に関連した語彙しか持たないが、それ以外の話題ではコミュニケーションが難しい



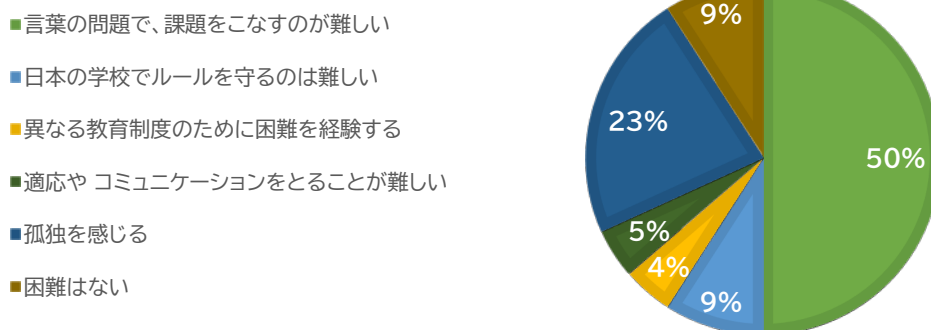
日本の学校に通うウクライナの子どもは、少しずつ勉強の上達を実感し始めている。調査対象となった保護者の約半数が、日本の学校に通った結果、「子どもの日本語能力が著しく向上した」と回答している。しかし、35%の子どもは、教科や授業で使う語彙をマスターしているだけで、日常会話は十分に上達していないことが、インタビュー調査で明らかにされている。しかし、教科に関連した語彙が増えたことで、教材が理解しやすくなった子どももいる(15%)。

日本の学校で学ぶ子どもを支援する必要性(回答数:19)



日本語の習得は徐々に進んでいるものの、避難してきたウクライナの子どもは、特に日本の学校での勉強に助けを必要としている。しかし、授業は日本語で行われ、ますます難しくなっているため、保護者にとっては深刻な課題となっている。回答者の40%近くが、子どもには勉強のサポートが必要だが、言葉が通じないためサポートができないと答えている。また、17%の保護者が、子どもには勉強のサポートが必要であり、保護者としてそのように努めているが、新しい日本語の単語が多いため、サポートが難しくなっていると回答している。また、約2割の子どもは勉強の手助けを必要としておらず、保護者はそのような手助けをすることができない。家庭教師など勉強を手伝ってくれる人がいる子どもは1割近くいる。

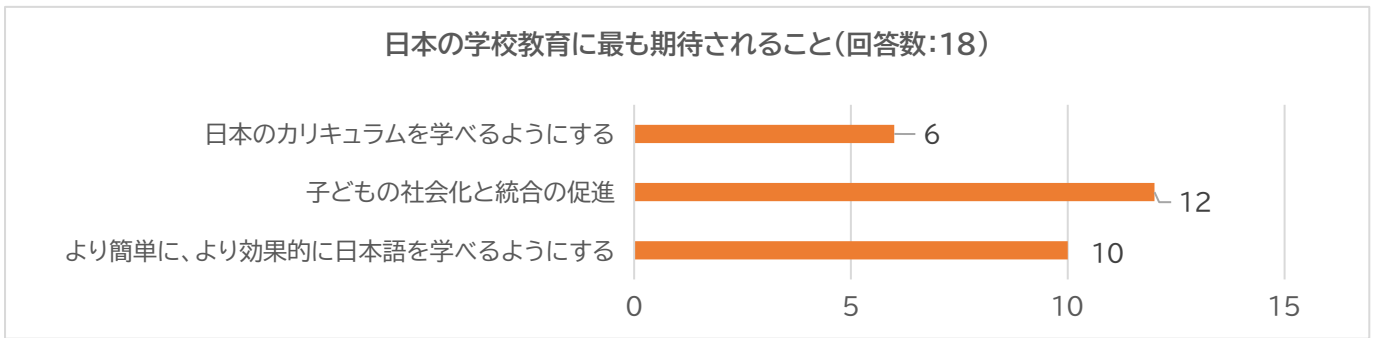
日本の学校で学ぶことの難しさ(回答数:19)



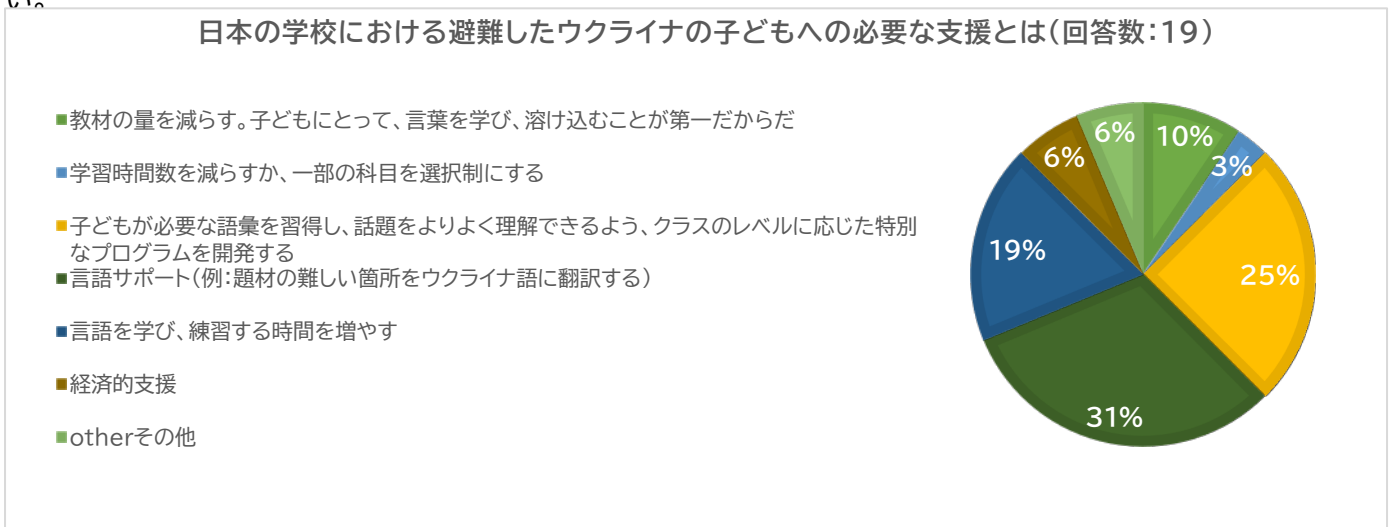
日本の学校で学ぶウクライナの子どもは様々な困難を経験しているが、その多くは言語から生じていると思われる。半数の子どもが言葉の問題でさまざまな課題をこなすのに苦労しており、約23%の子どもは学校で孤独を感じている。それ以外でも、避難したウクライナの子どもたちは、周囲の環境に合わせることの複雑さ、新しいルールに従わなければならないこと、異なる教育プログラムで勉強しなければならないことなど、多くの課題に直面している。



## 2-5. 日本の学校におけるウクライナの子どもの教育を改善・促進するための選択肢

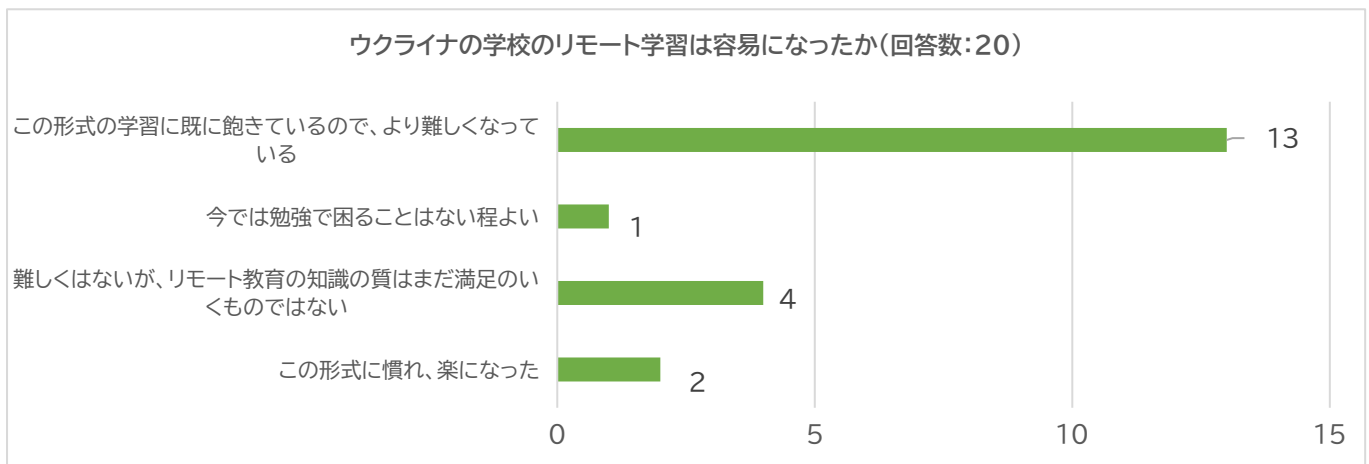


このような状況を改善し、避難しているウクライナの子どもの教育や精神面を支援するためには、日本の学校に通う子どもが、学校に一番期待していること、また彼らの将来への展望を理解することが重要である。これまでのところ、約43%が、子どもが日本の学校で学ぶ最も重要な理由は、「日本社会に適応する機会である」と回答している。また、「日本語の習得」を目的とする子どもは35%超となるが、日本語習得のために、日本の学校に通い、日本の環境に直接触れることが好ましいと考えられていた。多くのウクライナの子どものために、「日本の学校のカリキュラムを習得すること」は、ウクライナの学校でも同じような内容を学ぶことができるため、優先事項と考えられてはいない。

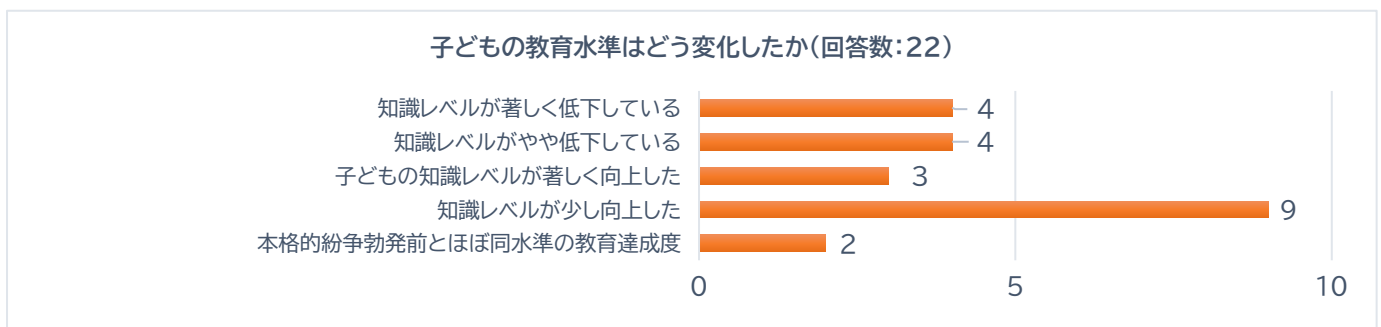


子どもが日本語をより早く習得するために、保護者はさまざまな方法を試している。大多数の保護者は、避難者が日本語を学ぶためにはさまざまなサポートが必要だと考えている。例えば、言語サポート(例えば、難しい学習ポイントや課題の説明をウクライナ語に翻訳したプリントなど)、ウクライナの子どものためのカリキュラムの編集(より簡単でわかりやすく、適切な語彙を盛り込む)、日本語学習全般のための時間の確保などが挙げられた。

## 2-6. ウクライナから避難した子どもの教育の変化

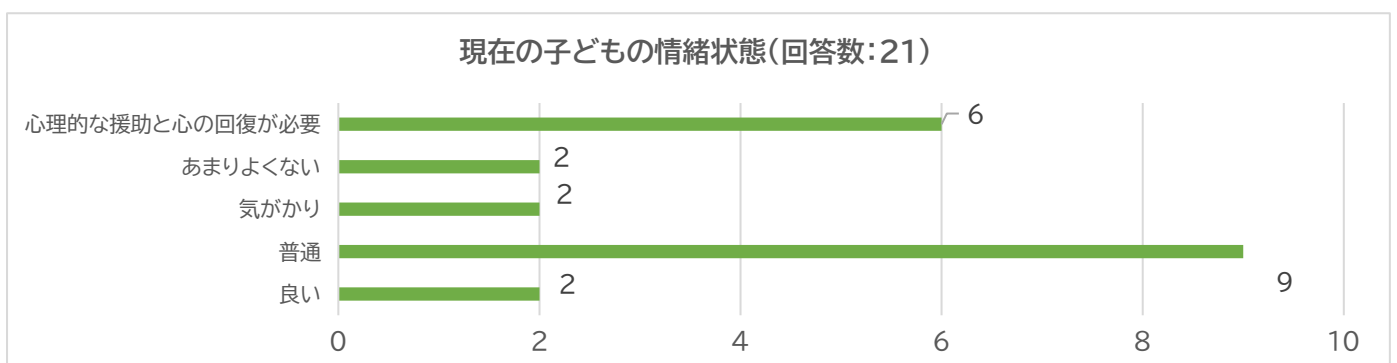


ウクライナ全土で紛争が続くこの 2 年間、海外に避難した子どもたちはリモートでしかウクライナの学校で学ぶことができなかった。子どもはこの形態に慣れることができたが、回答者の 65%は、「子どもがリモートでの学習に疲れ、対面での母国語を用いたコミュニケーションを必要としている」ために、リモート学習が困難になっていると指摘した。



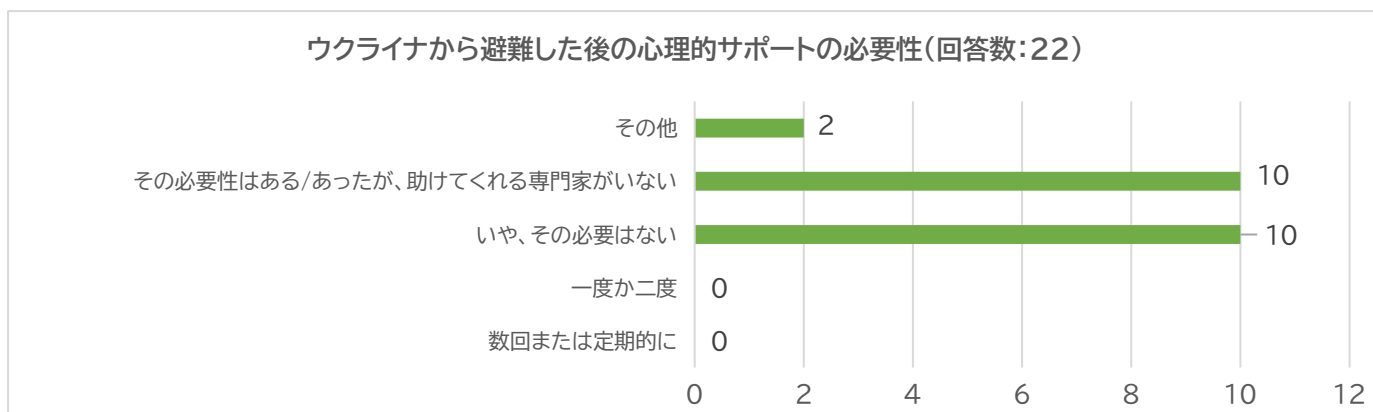
このような困難にもかかわらず、保護者の 2 人に 1 人(約 55%)は、子どもの全体的な学業成績が以前と比べて若干、またはかなり顕著に向上したと報告した。これは、日本での生活に徐々に慣れてきたことや、2 つの学校を行き来する時間をうまく管理できるようになったことが影響していると考えられる。他方、子どもたちの 35%以上は、知識面で著しい低下やわずかな低下が報告されており、これは、過労や疲労が原因かもしれない。

## 2-7. ウクライナから避難した子どもの現在の精神状態と心理的サポートの必要性



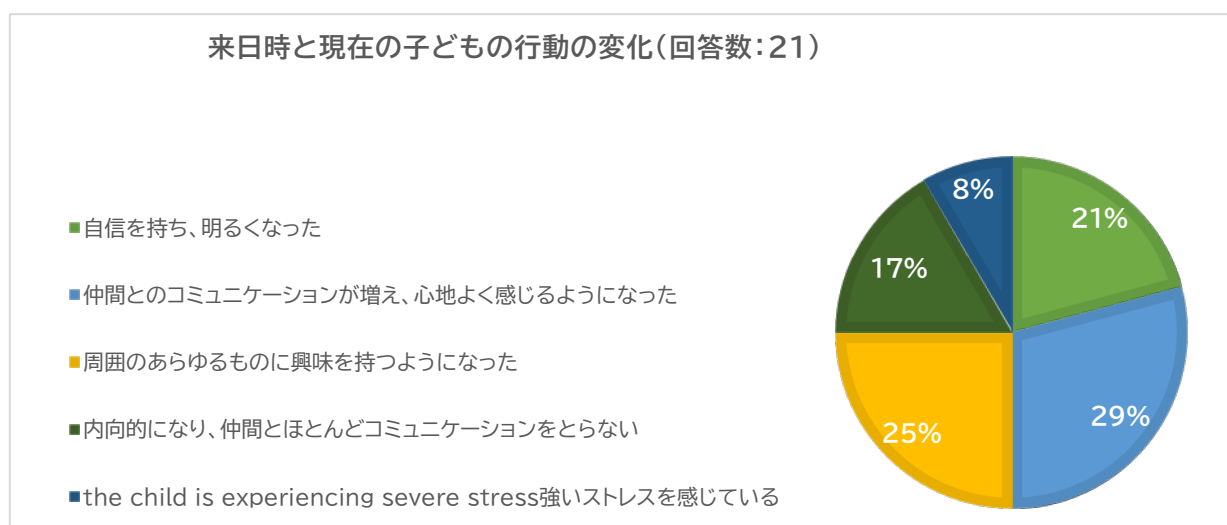
保護者によると、半数超の子どもが現在の情緒状態は「普通」または「良好」と感じている。しかし、回答者の約 2 割

は、「子どもの精神状態が良くない」、あるいは「子どもの精神状態が非常に心配だ」と述べている。また、30%近くの保護者が、子どもが経験した出来事やストレスの結果、心理的サポートや心の回復が必要だと考えている。

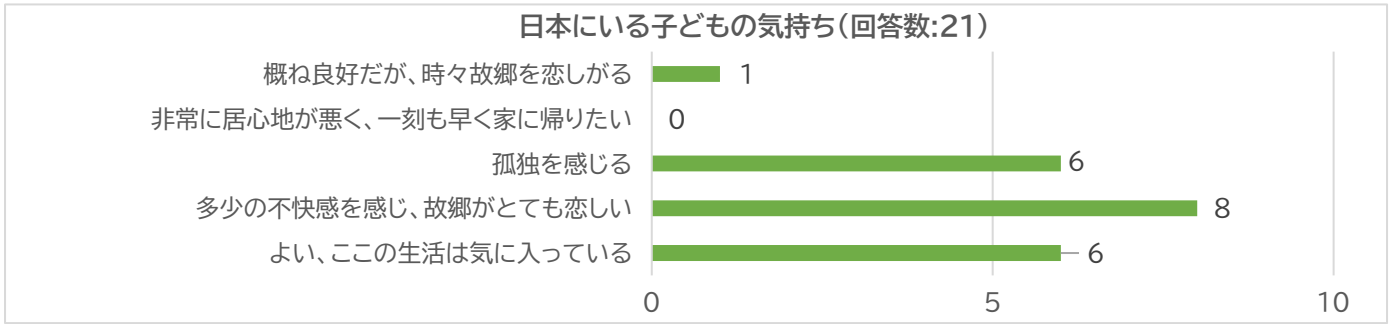


調査対象となった保護者の約 45%が、(過去または現在の)子どもに対する心理的サポートの必要性を述べているが、子どもを支援できる専門家が見つからないため、心理的サポートを求めていなかった。このような状況は、紛争による心理的トラウマやストレスを専門とする心理学者がほとんどいないことや、言葉の壁も障害となっている。

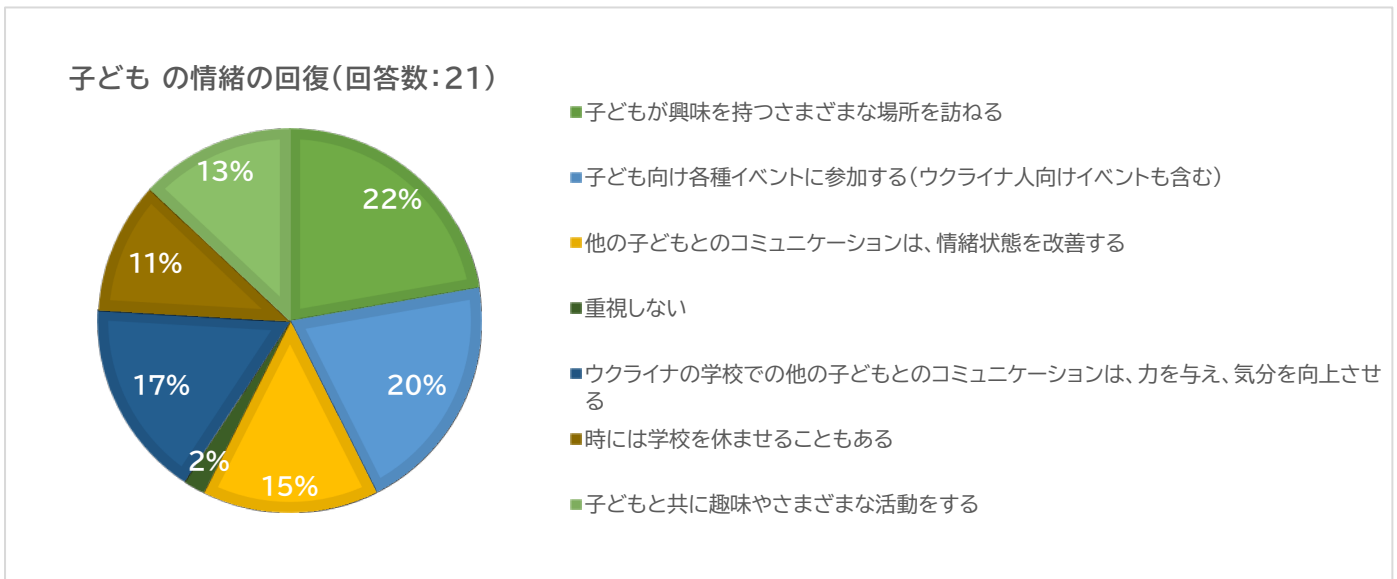
## 2-8. 避難しているウクライナの子ども現在の感情とその対処法



ウクライナの子どもが日本に避難してきてから現在に至るまで、彼らの精神状態や行動には多くの変化が起きている。当初、子どもは新しい国での生活に慣れるのが難しかったが、次第にウェルビーイングが向上し始めた。4人中3人の子どもが、日本でより快適に、より明るく過ごせるようになり、自信を持つようになった。仲間とのコミュニケーションも増え、身の回りのあらゆることに興味を持ち始めた。しかし、調査によると、約25%の子どもは、内向的になり社交性を失ったり、深刻なストレスを感じたりしている。



避難している子どもの多くは、ごく普通の感覚を持ち、普段通りの生活を楽しんでいると思われるかもしれないが、彼らの精神状態は依然として深刻なストレス下にある。調査結果によると、72%の子どもが何らかの不快感、ホームシック、孤独感を感じている。そのため、精神的な回復のため、あるいは環境に適応するための支援、同世代のウクライナ人の仲間との交流の機会が非常に必要とされている。



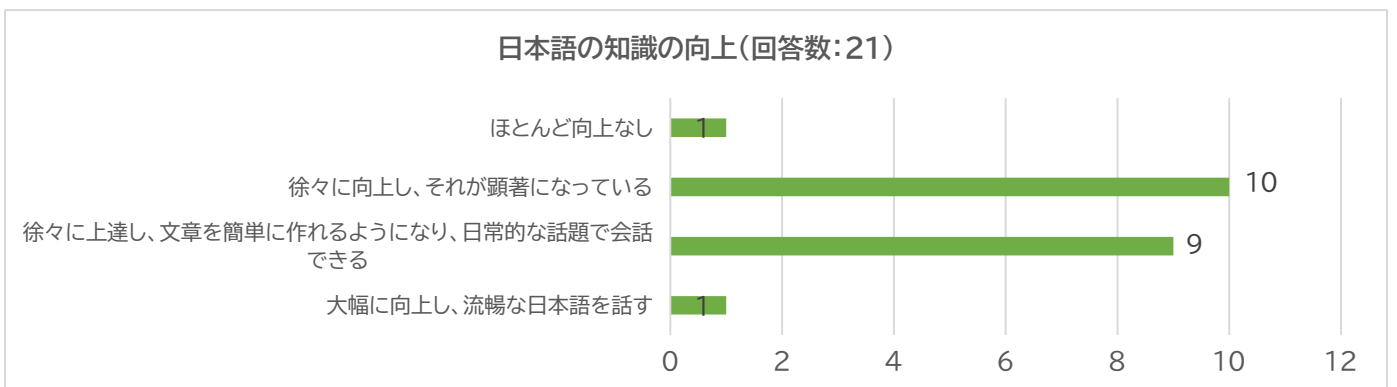
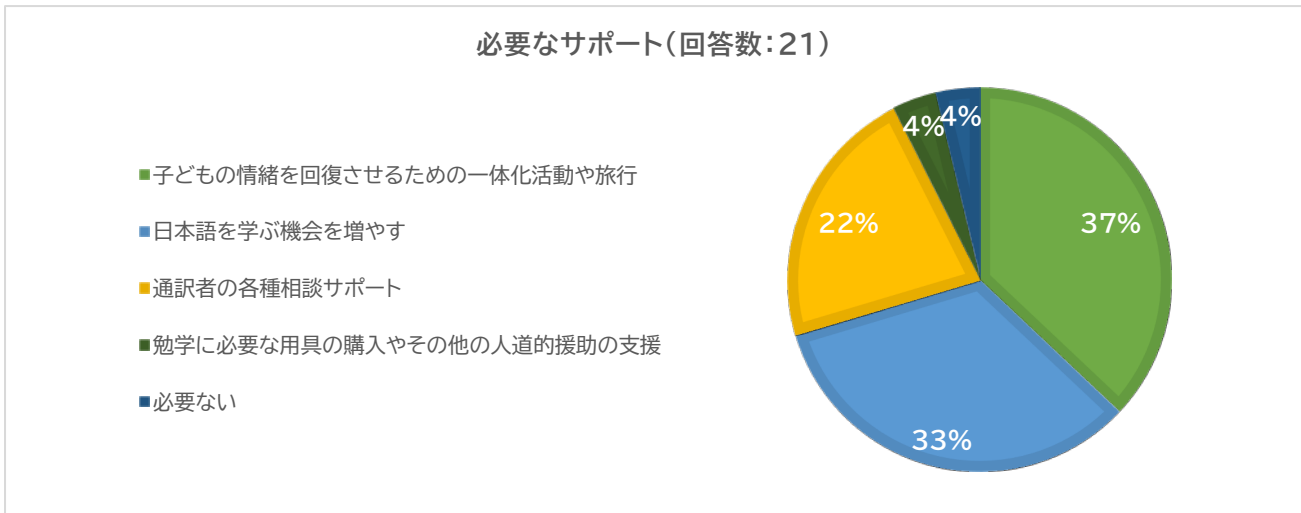
保護者は、さまざまな方法で子どもの心理状態の回復に努めている。40%超の保護者が子どもと一緒に旅行したり、ウクライナ人のために特別に企画されたさまざまなイベントに参加したりしていると回答した。子ども同士のコミュニケーションは、子どもたちのモチベーションやウェルビーイングを向上させるため、回答者の約17%が、「子どもをウクライナ日曜学校に通わせている」と答えている。また、子どもと共にさまざまな趣味を楽しんだり、子どもが疲れて学校に行けないと感じたら、授業を休ませたりすることもある。

## 2-9. 日本に避難しているウクライナの子どもの支援

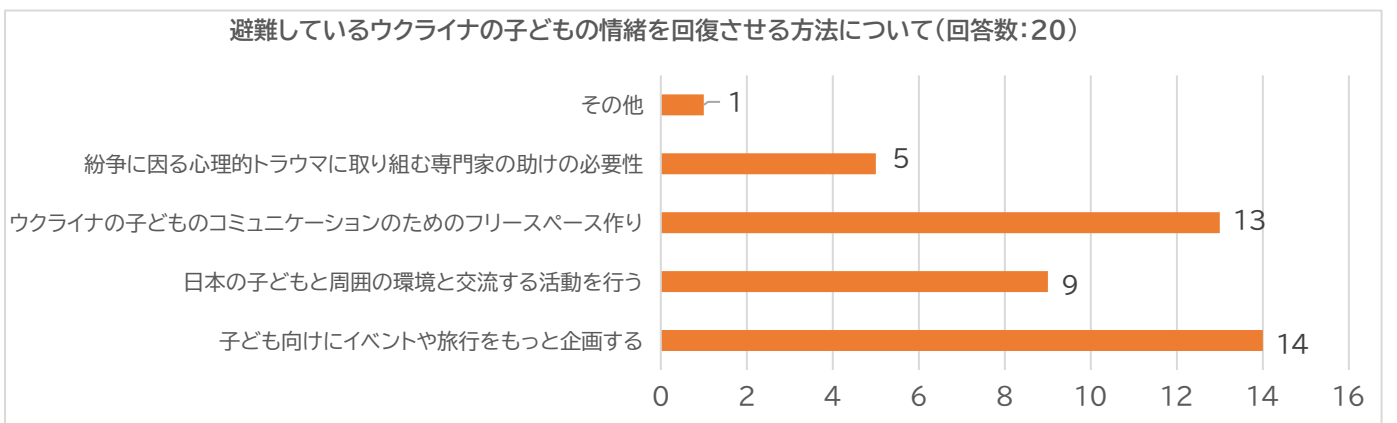
2023年4~6月に実施した調査では、子どもを持つ回答者の27%が、子どもがさまざまなクラブに追加的に参加するための経済的支援を必要としており、交通費による困難を経験していたり(24%)、子どもの教育に必要な備品やその他の人道的支援を必要としていた(12%)。様々な問題で通訳のサポートを必要とする回答者はわずかであった(5%)。

だが、今回の調査ではいくつかの変化が見られた。大半の子どもが、過重な勉強、ストレス、コミュニケーション不足を経験しており、精神状態を回復させるために、様々な活動や旅行に参加する機会を必要としている(37%)。また、勉強に必要な備品の購入や人道的な支援に対する緊急のニーズもなくなっている(わずか4%)。しかし、前回の調査結果と比較すると、さまざまな問題に対する通訳への相談支援のニーズは高まっている(22%)。この間、避難してきたウクライナ人の中には、通訳に様々な相談ができる仮設住宅から、別の住居に移り、日常的な問題のほとんど

を自力で解決しなければならなくなった人もいと推測される。



子どもの情緒を回復させるための様々な活動に加え、保護者は更に追加の語学学習の機会が必要であるとも指摘している(22%)。なぜなら、避難しているウクライナの子どもの大部分(90%)は日本語が少しずつ上達しているにもかかわらず、まだ自由に自己表現したり、様々な話題についてコミュニケーションをとることができないからである。



保護者たちは、イベントや旅行が増えること、ウクライナの子ども同士でいつでも交流できるフリースペースができることが、子どものメンタルヘルスの回復・向上に大きく役立つと考えている(65%)。また、日本の子どもとの多様な交流活動(22%)や、紛争による心の傷に取り組む専門家の助けを求める機会(12%)も重要である。

### 3.東京にあるウクライナ日曜学校「Dzherelce」教師へのインタビュー

東京にあるウクライナ日曜学校「Dzherelce」は、2009年に設立された。ウクライナで紛争が始まる前、同校の生徒数は約30人だったが、2022年以降、生徒数は倍増し、今では日本最大のウクライナ日曜学校となった。



「Dzherelce」は、主に NGO Kraiany の支援によって運営されており、紛争前に日本に住んでいた子どもには非常に少額の学費が課せられている（一方、避難してきたウクライナの子どもたちは、2023年度末まで完全無料で学ぶことができ、交通費も支給されていた）。現在、同校が抱える最大の問題は授業スペースが不足していることだ。



というのも、「Dzherelce」には2歳以上の幅広い年齢の、ウクライナ語の習得レベルも様々な子どもたちが通っているからだ。日本に長く住んでいる子どもや日本で生まれた子どももいれば、ウクライナ紛争がきっかけで日本に来た子どももいるため、多くのグループを作ることが急務であり、それぞれに個別の学習プログラムが必要とされた。同校の教師は、子どもを各々のスキルに合わせてグループ分けしようと努めているが、個別の教室や追加スペースの不足は非常に深刻である。

常設の校舎や教材の保管場所がないため、教師はすべての備品を持ち帰り、授業に持参しなければならない。もうひとつの課題はウクライナ語の本の購入で、教師たちは自費でウクライナから購入し、取り寄せている。現在、「Dzherelce」には幅広い年齢の子ども向けのウクライナ語の本がたくさんあるが、子どもがいつでも利用できるように置いておくスペースがない。

「Dzherelce」は、ウクライナ人の子どもが家庭のようにくつろぎ、ウクライナ語で流暢にコミュニケーションし、友達を作ることができる環境を作ること目的としているため、従来の学習プログラムに沿った指導は行わず、成績もつけていない。「Dzherelce」では、子どもがウクライナの歴史、伝統、文化を学び、コミュニケーション能力や創造性を向上させるためのレッスンを月に2回行っている。未就学児向けには、対話形式やゲームを使った発話の発達に関するレッスンがあり、学齢児向けには、言語、伝統的芸術、手工芸、振り付けなどのレッスンがある。当校では定期的に祝日や様々なイベントを開催し、日本の子どもと一緒に演劇を上演することで、楽しくリラックスした環境の中で多様なスキルを身につけ、ウクライナと日本の文化について学ぶことができる。



今回インタビューに協力してくれた教師は以下の5名である。

(写真左より) Natalia Kovalova (校長) / Natalia Lysenko / Myroslava Dyachinska / Kateryna Voloshenko / Iryna Chymak



### 3-1. 紛争が子どもの情緒に与える影響と心理的支援の難しさ。適応と支援

ウクライナから避難してきた子どもを受け入れ始めたころ、学校の教師たちは、ウクライナ紛争によるパニック発作や精神障害の事例を目にしていた。

私たちにとってもストレスの多い時期でした。新しい子どもと、既に私たちの学校で学んでいた子どもを一緒にしなければならなかったからです。避難してきた子どもの中には精神的なトラウマを抱えている子もいて、授業中に突然叫びだしたり、噛みついたりする子もいました。それが他の子どもを怖がらせ、ドミノ効果が起きました。大変だったのは、そのような子どもとどう接していいかわからなかったことです。更に、他の子どもに心理的危険を与えないようにしなければなりませんでした

- Natalia Lysenko、教師。

紛争に関連した心理的トラウマを扱う専門家がいなかったことも、困難に拍車をかけた。そのため、教師は、心的外傷後症候群を持つ子どもが新しい環境に適応できるように、また、彼らにそれ以上の危害を与えないようにするために、特別な講習を受け、彼らとの接し方を学ばなければならなかった。

しかし、このような状況は、子どもがウクライナから避難してきたばかりのころに多く見られた。今は、もう安全だとわかったので気持ちが楽になり、徐々に新しい国に適応している。教師は、紛争の影響、環境の変化によるストレス、新しい言語、2つの学校でのダブルワークなど、さまざまな出来事が原因でその心理状態に陥ったと考えている。

教師は日曜学校に通う子どもたちが明るく楽しそうにふるまっても、彼らの多くが今も心理的なサポートを必要としていると考えている。また、保護者からは、子どものために心理学者を探す手助けをしてほしいと繰り返し頼まれている。しかし、心理学では新しく、あまり知られていない分野であるため、紛争のためにケアを必要としている子どもに支援を提供できる専門家を見つけるのは難しい。

これは日常的な問題ではありません。子どもたちは紛争の犠牲者であり、まったく異なるアプローチと方法が必要です。そして、そのような子どもをどのように支援すればいいのかわからないという事実には私たちは直面しました。それに、この分野を専門とする心理学者を見つけるのはとても難しいのです。

- Natalia Kovalova 校長。

### 3-2. 避難した子どものコミュニケーションと適応。行動と感情の変化

教師たちは、ウクライナからの避難後最初の数ヶ月は、子どもたちがストレスと緊張にさらされていたと感じていた。しかし、そのような少しずつ解消され、子どもたちは徐々に落ち着きを取り戻し、お互いにコミュニケーションをとるようになった。

昨年(2022年)と比べると、現在も指導を続けている数人の子どもの行動が変化していることに気づきました。当時は、不安定で集中力がなかったのですが、時間が経つにつれて状況は大きく変わりました。仲間とのコミュニケーションも増え、評価はなくとも宿題をやりたがるようになりました。

- Myroslava Dyachinska 教師

教員や保護者は、ウクライナの学校に通い、慣れ親しんだ環境に身を置くことで、子どもたちの情緒に良い影響を与えていると見ている。母国語で仲間とコミュニケーションをとることで、子どもたちはよりオープンになり、明るくなった。しかし、月に2回だけの会合ではまだ十分とは言えず、多くの子どもは追加で連絡を取り合ったり、高学年の子どもは学校外で合同会合を開いたりもしている。

子どもたちはウクライナの学校に通えることをとても喜んでいますが。たとえ日本の学校に通い、日本人のクラスメートと積極的にコミュニケーションをとっていても、ウクライナの子どもは言葉の壁や精神的な問題から、感情表現の場が欠けてしまいます。ですから、自由にコミュニケーションをとり、自身の感情を表現できることは、彼らにとって非常に重要なことなのです。

- Iryna Chymak 教師

心的外傷後ストレス障害に対処し、日本に適応することが非常に困難な子どももいた。教師は、ストレスのために学校に通えなくなり、ウクライナにまで行った子どもの話を共有してくれた。日本に戻った後、彼女は「Dzherelce」で勉強を続け、他のウクライナの子どもとコミュニケーションをとるようになった。

今では彼女の目は喜びで輝き、いつも笑顔で誠実です。この子は大きく変わりました。少し前まで強いストレスにさらされていたとは想像もできません。

- Natalia Lysenko 教師

教師は、避難してきた子どもたちのメンタルヘルスだけでなく、彼らと、日本で生まれたり長く住んでいる子どもとの行動の違いにも気づいた。



生活習慣が違うからか、子どもの行動も微妙に違います。ウクライナの紛争で最近日本に来た子どもは、感情表現が少し違います-少し大きな声で、明るく。でも、徐々に日本の生活にも慣れてきます。

- Kateryna Voloshenko 教師

### 3-3. ウェルビーイングが子どもの学業成績に与える影響。避難してきたウクライナの子どもにおける困難

日本に避難している子どもの多くは、教科書に集中し理解することが非常に困難である。

ストレスは思考力や分析力に直接影響します。ストレスは脳内で起こる物理的なプロセスであり、集中力や記憶力、そしてもちろん学習過程でも顕著に現れます。

- Natalia Lysenko 教師

子どもが圧迫感や不安感を感じないよう、「Dzherelce」の教師は常に教室を居心地のよい雰囲気になるよう心がけている。教師は、勉強よりも道徳的・心理的な状態が最も重要だと感じたとき、子どもがより心を開き始めることに気づいている。また、「Dzherelce」は子どもを評価しないので、子どもたちは間違いを恐れず、自己表現しやすくなる。

もし子どもたちが不快感や束縛を感じているならば、子どもはどんな情報も感じ取ることができず、学習は困難になります。ですから、私たちは子どものウェルビーイングを第一に考え、そのために必要なすべての条件を整えているのです。

- Natalia Lysenko 教師。

ウクライナの子どもたちは、複数の教育機関で同時に学ばなければならないという事実によって、彼らの生活は困難を抱えているが、日曜学校ではリラックスできる。教師は、ウクライナの子どもがリモートでウクライナの学校の教育を受けることは非常に重要だと考えている。なぜなら、日本とウクライナの教育プログラムは大きく異なるからだ。同時に、日本の学校に通うことは、特に来日したばかりで日本語がまだ十分でない子どもにとって、日本語の習得に非常に役立つ。

### 3-4. ウクライナから避難した子どもに必要な支援と援助

同校の教師の大半は日本在住歴が長いいため、避難してきた子どもの保護者は、教育上の問題を含め、定期的にさまざまな相談をしてくる。教師によると、ウクライナから日本に避難してきた子どもとその保護者は、各々の計画によっていくつかのグループに分けられるという。これは、特定の避難者がどのような支援を必要としているかを理解するのに役立つ。日本に避難し、日本社会に溶け込みたいと考えているウクライナ人の子どもは、地元の学校に通って日本語を学ぶべきである。

これらの子どもや保護者たちが、将来ウクライナのルーツやアイデンティティを失わないようにするためには、支援が必要です。そのためには、母国語で他のウクライナ人とコミュニケーションをとり、ウクライナの文化を学び、ウクライナの行事に参加し続ける必要があります。

- Natalia Kovalova 校長

ウクライナ人のもう 1 つのグループは、日本に一時的に滞在し、安全が確保され次第ウクライナに帰国することを予定している人びとである。このような人々の子どもはウクライナの学校で教育を続けるべきであり、社会に順応するために日本の学校に通うことが望ましい。

子どもがリモートでも質の高いウクライナ教育を受けられるよう、多くのサポートが必要です。しかし、一時的な滞在であることを理解している子どもが日本の学校に行くことを拒否すれば、コミュニケーションに問題が生じ、社会性を失う危険性があります。 - Natalia Kovalova 校長。

しかし、もうひとつの問題は、2校、3校で学ぶことによる子どもの負担過多である。それでもなお、子どもには休息や精神的な回復の時間、そして最も重要なこととして、母語による仲間との生きたコミュニケーションの時間が必要であるが、その欠落は教師にも保護者にも指摘されている。

## 4. ウクライナから避難してきた子どもの母親や祖母へのインタビュー

ウクライナから避難してきた子どもの母親 4 人と祖母 1 人に話を聞き、教育の進捗状況や子どもの精神状態をより広く把握することにした。そのうち 3 人は学齢期の子どもを持ち、2 人は幼稚園に通う子どもを持つ。子どもの様子、子どもが直面している問題についての見識や、日本に避難しているウクライナの子どもの学習や情緒的な状況の改善策を共有した。

### Yana Kovalenko、37 歳

Yana は Evelina(12 歳)、Violeta(7 歳)、Antonina(2 歳)の 3 人の娘と夫の Roman とともに日本に避難してきた。彼らは 1 年以上前にミコライフ州のペルボマイスク市からやって来て、今は千葉に住んでいる。

#### ウクライナの学校での勉強

Yana の上の娘たちは、家族単位でウクライナの学校に通っている。娘たちが通う学校では、オンライン授業と対面授業を交互に行なっているからだ。この教育形態では、子どもたちは課題をこなして提出するだけだが、より深く理解するために、彼女たちは機会があればオンラインレッスンにも参加するようにしている。

#### 日本の学校での勉強

Yana の 2 人の娘は 2023 年 10 月から日本の小学校に通い始めた。Evelina は 6 年生、Violeta は 1 年生だ。この決断は、子どもたちが同級生とコミュニケーションをとり、言葉をより簡単に学べるようにするためであり、Yana と Roman は、彼女たちの勉強について過度な要求はしていない。学校の教師は、子どものタブレットに自動翻訳機をつけたり、緊急時に備えて学校に携帯電話を持ち込めるようにしたり、週に 3~4 回日本語の個別授業を行ったりと、可能な限りあらゆる方法で子どもをサポートし、助けようとしている。

母親は、学校の教師が子どもたちにとっても誠実で理解があることにとても驚いている。彼らは定期的に彼女と面談し、子どもたちが勉強についていけているか、疲弊していないか、学校で快適に過ごせているかなどを尋ねてくる。保護者会で Yana は、子どもたちが日本人のクラスメートととても仲良くなったと聞いた。小学 1 年生の Violeta は、他の子どもと一緒に歩いて帰ったり、放課後に集会に行ったりしている。日本の学校で勉強し、クラスメートとコミュニケーションをとるのは、言葉の問題でまだ難しいが、緊張感はないようだ。

#### 子どもの情緒を回復させる 子どもたちのメンタルヘルスの変化

子どもの情緒を回復させるため、一家は定期的にウクライナ人たちとのさまざまなイベントに参加したり、近くを旅行したりしている。そうすることで、子どもたちがリラックスし、活力をたくわえられる。日本の公立学校とウクライナの学校にリモートで通うだけでなく、Evelina と Violeta は東京のウクライナ日曜学校にも通っている。保護者は、日本やウクライナ日曜学校に通うことで、子どもの情緒が大きく改善され、日本での生活に興味と喜びを感じるようになったことに気づいた。特に長女は、ウクライナ人の同級生とのコミュニケーションのおかげで、行動に顕著な変化が見られたという。来日当初、Evelina はほとんど外出せず、ほぼ誰とも話さず、彼らは心配していた。しかし、日曜学校に通うようになってからは、そこで友達を見つけ、学校以外でも社交や旅行を楽しんでいる。



### 3つの学校での勉強と余暇の時間配分

Yana は、娘たちの過労を防ぐため、ウクライナの学校でも日本の学校でも、娘たちが疲弊しているときは、学校の授業を休ませることがある。日本の学校では、Evelina と Violetta はほとんど宿題をする必要がないので、普段はストレスを感じることはない。時々、下の娘に簡単な課題(例えば、何かを書いたり読んだりすること)が出されることもあるが、これは一般的ではなく、強制でもない。しかし、いずれにせよ、多くの課題を課されると、娘たちは過労を感じる。彼女たちの母親は、2つの学校で勉強しているにもかかわらず、娘たちはいつも休んだり遊んだりする時間を見つけているということから、保護者は娘たちが元気であることに自信を持っている。

### Iryna Chymak, 36歳

Iryna はウクライナのブチャに住んでいたが、2022年の春、親戚の勧めで11歳の息子Markと日本に避難した。紛争が始まったばかりの危険のピーク時に家を出たので、子どもは街の内外で砲撃の被害を目の当たりにし、感じなければならなかった。

#### ダブルスクールでの勉強

ウクライナでの紛争が始まって以来、Mark はウクライナの学校でリモート学習を続け、現在5年生になった。日本に着くと、数週間で日本の学校に通い始めた。

Mark の母親は、息子が2つの学校で同時に勉強するのはかなり難しいことに気づいている。日本の学校では、毎日、教科に加えて新しい単語を覚えなければならないし、家に帰って少し休むと、ウクライナの学校の宿題をしなければならない。言葉の問題でMarkが理解できない科目があることもある。だから、Irynaは息子が日本語学校でいい成績を取ることを要求しない。教師もまた、子どもの二重の負担に同情的で、楽になるように努めてくれるが、それでも多くの課題をこなさなければならない。この学校には他の外国人も通っているため、Markは通常の授業に加えて日本語の授業も受けている。

Markは紛争前に通っていたウクライナの学校の勉強を続けたいと考えている。しかし、この学校は現在対面授業のみで、オンライン授業は行っていない。そのため、彼は家庭内教育という形でウクライナの学校での勉強を続けている。これは、保護者が子どもの学習プロセスを自ら編成し、教師は教育学年の中間と期末に各種試験を実施し、子どもを評価するのみという学習形態である。Iryna自身も教師であるため、息子のほとんどの教科を手助けしようとしている。しかし、Markはクラスメートとのコミュニケーションが不足しており、徐々に日本にいるウクライナの子どもとコミュニケーションを取り始めている。

#### 言語学習の進歩

Irynaは、息子が日本の学校で勉強している間、教科に関する語彙はほとんど覚えて使えるが、日常的なコミュニケーションが難しいことを心配している。言葉に不安を感じ、自ら近づいて質問することは、Markにとっては不快であり、それは精神的に辛いことでもある。

#### 子どもの精神状態

ウクライナから避難してきたIrynaと息子は、環境の変化に戸惑い、ウクライナでの経験に苛立ちを感じていた。最初は大きな音(花火やヘリコプターなど)を怖がっていたが、やがて安心できるようになり、精神状態は正常に戻った。しかしIrynaは、この経験が将来Markの心理状態に影響を及ぼさないか、まだ心配している。なぜなら、彼は感情を露にすることが少なく、ウクライナには帰りたくないと言っていたからだ。しかし、母親がこのことについて息子



と話をするようになると、紛争中にそこで見たり体験した危険や恐怖を今でも覚えているため、帰りたくないということがわかった。今、Iryna は息子がウクライナの家、父親、友人をととても恋しがっていると感じており、過去の楽しかった思い出をよく思い出している。

### 子どものウェルビーイングの変化

ウクライナ人の仲間とのコミュニケーションは、Mark がリラックスし、情緒的な回復をするのに役立っている。そのため彼は、母親も働いているウクライナ日曜学校 Dzherelce に通っている。Iryna は、ウクライナ人の子どもと会っている間、息子が負荷を解消し、ストレスを発散している様子であることに気づいた。この学校ではウクライナ人の友達もでき、とても楽しく過ごしている。その結果、息子の精神状態はかなり改善された。しかし Iryna は、このような集会や 旅行が増えればよい、あるいはウクライナの子どもがコミュニケーションをとり、一緒に時間を過ごすためにいつでも特別なセンターに集まればよい、と考えている。

Iryna と息子は将来ウクライナに戻るつもりだが、それはウクライナが完全に安全になってからだ。彼女は子どもを危険にさらしたり、常にストレスを感じさせたりしたくないのだ。Mark は既に精神的トラウマを負っているため、彼女は Mark に現在も将来も普通の子供時代を送ってほしいと願っている。

## Kateryna Voloshenko、35 歳

Kateryna は 1 年半ほど前、息子の Andrii(8 歳)と娘の Anna(11 歳)の 2 人の子どもを連れて、ザポリツィア市から日本に避難してきた。子どもたちは現在、リモートでウクライナの学校、インターナショナルスクールで学び、東京のウクライナ日曜学校「Dzherelce」にも通っている。また、娘はウクライナの美術学校でリモートで学んでいる。

Kateryna の子どもたちは日本の学校に通っていたが、インターナショナルスクールからオファーがあり、Anna と Andriy にとって、学校の科目は今のところ英語で教える方がいいし、楽だろうということで、その学校に通うことにした。

### 子どものウェルビーイングと心の回復

子どもたちのウェルビーイングを取り戻すため、平日はほとんど自由な時間がないため、Kateryna は週末にちょっとした旅行を企画し、興味深い場所を訪れるようにしている。Andrii と Anna も、勉強に追われているにもかかわらず、ウクライナの日曜学校に通うことをとても喜んでいる。日曜学校に通い始める前は孤独を感じ、ほとんどコミュニケーションもなかったが、今ではウクライナ人の仲間と共通の趣味を見つけ、一緒に楽しんでいる。

### ウクライナの学校でリモート学習

Kateryna の子どもたちは、毎日ウクライナの学校での勉強に時間を割いている。必要な課題はこなしているが、日本のインターナショナルスクールに通っているため、オンライン授業に参加することは難しい。特に Andrii は、日本に避難してきたとき幼稚園に通っており、日本の学校で初めての学校生活を送っていたため、リモート学習という形態に慣れるのに苦労している。リモート学習では、教師やクラスメートと対面でコミュニケーションをとる機会がないため、子どもは集中力を欠き、サポートを受けることも難しくなる。



## Tetiana、(回答者の希望により姓と年齢は記載しない)

Tetiana は 2022 年春、6 歳の孫娘 Erika とともにドニプロ地方カミアンスケ市から日本に避難してきた。Erika はウクライナ人と日本人のハーフだが、4 歳の時に初めて避難民として日本に来たそうで、現在は祖母と母親と一緒に暮らしている。

この春、Erica は日本の学校で 1 年生になる。祖母は、彼女が周囲になじめるかどうか、不安には感じていない。というのも、Erica は日本に住んでいた約 2 年間、幼稚園に通い、日本語をマスターしており、他の子どもと誤解するようなことはなかったからだ。時々、祖母は孫に、なぜ日本の子どもは文化的背景から彼女と違う行動をとるのかを説明しようとしている。

流暢な日本語を話す Erica は、幼稚園で日本人の友達もできたが、ウクライナの子どもとコミュニケーションをとることはまだできず、故郷のウクライナを恋しがっている。そのため、Tetiana は定期的にウクライナ人の子どもたちとの交流会を開いている。しかし、Tetiana は、日本語や英語でのコミュニケーションが難しいため、日本人の家族と同様の交流会を開くことができない。孫娘の心の健康と全面的な成長のために、Tetiana はウクライナ人向けのイベントやさまざまな子どもの活動に同行し、一緒に旅行するようにしている。



## Alyona (回答者の希望により、名前を変更し、年齢も記載していない)

Alyona(仮名)は 2022 年の春、4 歳の娘 Yulia(仮名)と共にキエフから日本に避難してきた。幼いこともあり、Yulia はすぐに日本の生活に慣れた。幼稚園で一から日本語を習い始め、今ではとても上達している。

通訳を使わず、ゲームや絵を通してのみ日本語を学んだ Yulia は、自身の基本的な欲求を説明する方法を既に知っており、幼稚園の他の子どもともうまくコミュニケーションをとることができる。また、他の子どもの行動や感情、行動をよく観察し、それを再現しようとする。Yulia は日本の幼稚園に通うことを熱望し、母親を驚かせた。Alyona は、日本の幼稚園の教育システムや子どもとのコミュニケーション方法の質の高さにとても感心している。

彼女は娘の将来の教育について何の心配もしていない。なぜなら、日本語を話す環境にいる幼い子どもは、単語を覚えなくても言葉をよく理解し、新しい国での生活にもすぐに慣れるからだ。しかし、それにもかかわらず、Yulia はまだ故郷を恋しがっており、「ウクライナにはいつ帰れるのか」と定期的に尋ねてくる。そこで Alyona は滞在中、定期的に娘をウクライナの日曜学校のクラスに連れて行っている。母国語でウクライナの子どもとコミュニケーションが取れることは、娘にとって大きな喜びである。ウクライナ語で話す方が簡単で、感情表現も明瞭だからだ。

## 結論

保護者や教師にインタビューした結果、ウクライナから避難してきた子どもたちはいまだに様々な困難に直面していることがわかった。コミュニケーション不足、深刻なホームシック、言葉や環境に合わせることの難しさ、2つの学校で学ぶことによるストレスや過負荷などである。保護者の中には、子どものメンタルヘルスを心配する人もおり、紛争による心理的影響に対応できる専門家を見つけるのが難しいという声も聞かれる。また、多くの子どもが勉強の手助けを必要としているが、ほとんどの保護者は、言葉の問題からそれができないでいる。

しかし、それとは別に、多くの子どもは徐々に行動やウェルビーイングにおいて状況が好転している。日本語でのコミュニケーションが容易になり、多くの子どもたちが日本人の友人を作り、日本での生活を楽しむようになった

言語能力は子どもの年齢に大きく左右される。就学前の年齢で日本に避難してきた子どもは、何の困難も経験することなく、いとも簡単に日本語を理解し、コミュニケーションをとるようになった。彼らにとって、将来日本の学校で勉強することは、はるかに簡単で効果的であろう。しかし、学齢期に来日した子どもは、新しい言語を習得し、日本社会に適応することがより難しくなる。

ほとんどの子どもが日本人の子どもと良好な関係を築いているが、言葉の問題からコミュニケーションに限界を感じ、孤独を感じている可能性もある。子どもの年齢に関係なく、彼らは皆、ウクライナ人の仲間との対面でのコミュニケーションを必要としており、ウクライナの日曜学校はその大きな助けとなっている。このような集まりは、子どもの精神状態や全体的なウェルビーイング/幸福に良い影響を与えている。

避難している子どもが直面している困難や彼らのニーズに応じ、彼らの勉強の負担を軽減し、精神状態を改善できるような支援やサポートの方法がいくつかある。

1. ウクライナと日本の子どもの文化交流の場を増やし、ウクライナの子どもが互いに交流する機会(場やイベント)を作ること。どの年齢の子どもにも必要なことであり、それが彼らの情緒を回復させ、孤独を感じさせず、日本での生活をより楽しむことにつながるからである。
2. 日本の学校において、言語サポートの機会を設けること(例:難しい学習場面での通訳、レッスンの内容に合った語彙など)。これにより、子どもは自ら方向性を定め、教材を理解し、言語をより容易に習得することができる。
3. 日本の学校では、日本語学習の時間を増やすために、条件付きで教科数を減らすこと。ほとんどの子どもは日本語を学ぶことと日本社会への社会化を主な目的として日本の学校に通っており、ウクライナの学校でも同じような内容を学んでいるため、教科の習得自体は二の次である。
4. 紛争による心理的トラウマを専門に扱う専門家を必要とする人に見つける手助けをすること。相当数の子どもが心理学者の支援を必要としているにもかかわらず、彼らの問題を解決できる専門家を見つけることができないのである。

女の子の力を、世界を変える力にする。



プラン・インターナショナルは、女の子が本来持つ力を引き出すことで 地域社会に前向きな変化をもたらし、世界が直面している課題の解決に取り組む国際 NGO です。世界 75 カ国以上で活動。世界規模のネットワークと長年の経験に基づく豊富な知見で、弱い立場に置かれがちな女の子が尊重され、自分の人生を主体的に選択することができる 世界の実現に取り組んでいます。

本レポートに関するお問い合わせは、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンまで

Tel: 03-5481-3533

E-mail: [advocacy@plan-international.jp](mailto:advocacy@plan-international.jp)

HP: [www.plan-international.jp](http://www.plan-international.jp)